

久万高原町の取り組み

本会は、昨年度までの2年間に閣府が提唱し、全国で取り組まれた「新しい公共支援事業」を愛媛県から受託し、地域の活性化に向けた事業を実施しました。その中で東中南予の各地域で様々な地域の担い手の方と協働しながら、セミナーとフォーラムを開催しました。

今年度は、2年間の成果報告として、8月31日に「えひめ協働推進フォーラム」を開催しました。また、この報告会に先立ち、久万高原町と伊予市双海町で地方分科会を実施し、東中南予で開催したセミナーとフォーラムを通して生まれた地域の課題解決のための活動を深めるとともに、地域住民に活動を周知しました。今回は、平成24年度に開催した「地域応援セミナーちゅうよ」の成果を基に、久万高原町で行われた取り組みについて紹介します。



新しい公共とは？

おおよげ

官が独占してきた領域を「公」に開き・市民・企業・NPO等がともに支え合う仕組み、体制

古くから日本の地域には、人々の支え合いがありました。その人々の繋がりを今の時代にあった形で作り直します。

住民の多様なニーズにきめ細かくこたえるサービスを市民・企業・NPO等によりムダのない形で提供

行政だけが公共の役割を担うのではなく、地域の様々な主体が、公共の担い手としての自覚と責任を持つ必要があります。それぞれの得意分野を活かせば、きめ細やかなサービスを提供できるかもしれません。

一人ひとりの居場所と出番があり、人に役立つ幸せを大切にすること

一人ひとりが支え合い、地域課題に向き合いながら、解決にむけて活動するなかで、地域の絆、一人ひとりの居場所と出番をもう一度考えます。



住民同士の話し合い

久万高原町では、福祉の枠を越えて、地域住民が連携し、ともに地域を考え課題を解決をしていくために、様々な活動、仕事をされている地域住民の皆さんが集まりました。

アドバイザーのNPO法人まちづくり支援えひめ 前田眞先生のコーディネートで、久万高原町で解決したい地域課題を洗い出し、課題と目標を共有しました。

重要度、達成の容易度、緊急度の3つの角度から検討し、住民同士の意見交換の結果、「居場所づくり」と「地域資源活用」という2つのテーマに分かれて作業部会を設置し、自分たちにできることを話し合っていくことに決定。

7月21日(日)の地域福祉フェスティバルにおいて中間報告を行うことで、地域課題解決にむけた活動のきっかけにしていくことになりました。久万高原町社協が事務局となり、19名の多種多様なメンバーが「天空の郷地域福祉フェスティバルin久万高原実行委員会」を立ち上げました。

様々な課題が出されました

若者、居場所、病院、買い物、移動手段、空き家、独居不安、少子化、担い手の不足…など



居場所づくり

グループ名「group 縁側」

「気持ちのいい場所」をキーワードに、居場所のイメージや居場所づくりに必要なものを考える。

話し合いは、気持ちのいい居場所とは何かという課題からはじまりました。「『心の居場所』ができてはじめてハードの居場所ができる」、「いろいろな活動場所があっても、その場になかなか行けない人たちやどこにも属していない人たちが、自然に集まる場が必要」といった意見が出されました。

分科会では、「高齢者」「子ども」「まちおこし」「コミュニティ」それぞれの分野で町内で活動している方に報告してもらうことになりました。グループで話し合ったことやコーディネーターからのアドバイス、気が付いたことから、自分たちが出来ることを認識し、実行することに繋いでいくことになりました。

地域資源活用

グループ名「お宝探し隊」

廃校した校舎や空き家の活用と川をキーワードに、久万高原町でできることを考える。

「久万高原町の資源は何か」ということを意見を出し合いながら、話し合いが行われました。「川」を活用して何かできないか、廃校になった面河小学校の校舎や空き家を利用し、三世代交流を行い、イベントのきっかけにできないかといった意見が出されました。7月21日の中間報告にむけて、廃校、空き家、川この3つを結び付け、地域を元気にしていくためにはどうしたらいいのか考えました。

分科会では、町内外の資源活用の活動を報告いただくとともに、川と廃校利用に付加価値をつけることによる新たな可能性を考え、フェスティバル終了後の目標を見つけていくことになりました。

「天空の郷地域福祉フェスティバル in 久万高原」開催

平成 25 年 7 月 21 日(日)に天空の郷地域福祉フェスティバル in 久万高原実行委員会、久万高原町社協、愛媛県社協の主催で「天空の郷地域福祉フェスティバル in 久万高原」を開催しました。当日は、町内外から約 400 名の参加があり、町内外のまちづくりの事例と実行委員会での話し合いや活動を報告し、久万高原町のこれからについて考えました。

シンポジウム「共に創る地域の未来像」

コーディネーター：今治 NPO サポートセンター	事務局長	山本 優子 氏
パネラー：いよココロザシ大学	理事長	泉谷 昇 氏
森のともだち農園	代表取締役	森 智子 氏
実行委員長		竹森 洋輔 氏



実行委員長の竹森氏から、久万高原町の地域課題と、異業種の19名が集まった実行委員会で、久万高原町を今後どのような町にしていきたいか話し合ってきたことの報告がありました。また、いよココロザシ大学の泉谷氏から「地域資源活用」、森のともだち農園の森氏から「居場所づくり」の事例を紹介していただきました。

第1分科会「縁側発見プロジェクト」～気持ちのいい居場所を一緒に探しましょう～



コーディネーター：森のともだち農園	代表取締役	森 智子 氏
パネラー：久万高原町社会福祉協議会	統括支所長	森田 美鈴 氏
地域子育て支援センター Happy House	保育士	村田 由美 氏
くまタウン連盟	連盟長	大原 貴明 氏
居場所づくり「group 縁側」	部会長	二宮 悟郎 氏



久万高原町内での居場所づくりの事例について、パネラーから報告があり、参加者からも様々な意見が出されました。コーディネーターの森氏からは、気負いなく気軽にやってみること、コアなメンバーだけでなく、緩やかな関係性でのサポートや、緩やかな絆をつくっていくことの大切さが語られました。また、参加者が今回のパネラーに関心を持つことによる今後の広がりも期待されていました。

インタビュー



「group 縁側」 部会長 二宮 悟郎 氏

旧久万町出身。東京の世論調査機関勤務を経て、平成17年3月、実家の二宮醸造株式会社を継ぐため東京からUターン。代表取締役。平成23年11月、久万高原町商工会青年部メンバーが、町の活性化を担う実行部隊として立ち上げた、まちおこしグループ『GO!30minutes 久万高原実行委員会』の事務局長に就任。現在、軽トラ市(くまくるまるしえ)の実行委員も務めている。

◆今回の取り組みの感想

アウトホームな雰囲気の中、フェスティバルを開催できました。分科会では、参加者の町内町外の方々に思いを聞き、胸が熱くなりました。今まで、表には出て来なかった思いを聞くことができたと思います。今回実行委員会で、様々な方たちが出会えたことは、今後の財産になると思います。これから誰かが何かをしようとするとき、協力する人は必ず増えると考えています。今後、気持ちの面でのつながりを深めながら、新しい取り組みを始めるスタートがきれたのではないかと思います。

◆今後の展望

人口が減少している現状のなかで、今までの考えや枠に閉じこもってはいけなと感じています。今後、この久万高原町で生活していく子供たちに、残せるものは残していけないといけません。枠を越えて、それぞれの力を重ねあわせながら、町のために何かやらないといけない時代が来ています。強制的なものではなく、穏やかなネットワークづくりをしていきたいです。

◆久万高原町への想い

町外の方に、「ここは宝の山だね」と言われます。私も東京からUターンしてきました。東京にしかないものも、もちろんありますが、人工的に作られたものが多いです。もう一度、ここにしかないものを私たち自身が認識し、PRしていけたらと思います。また、来られる方をつかりさせないように、本当の意味でのおもてなしも必要だと思います。

第2分科会「集落の未来を考える」～地域資源を活用し共に創る地域～

コーディネーター：いよこコロザシ大学

パネラー：伊予市地域おこし協力隊

喜久家プロジェクト

田んぼの学校

美川地区代表

理事長 泉谷 昇氏

富田 敏氏

副代表 浅野 長武氏

元校長 竹内栄一郎氏

坂口 大作氏



町外の資源活用の取り組みの報告が行われた後に、町内での取り組みの報告と地域資源を活用して、どのような未来を目指していくかという発表がありました。久万高原町で活動している竹内氏からは、「地域資源は自分たちの周りにあり、気が付かないことが課題。外から来る「外の人」に私たち「地の人」が元気づけられている。」というお話がありました。

インタビュー



「お宝探し隊」 部会長 坂口 大作 氏

20代の頃に上浮穴郡連合会青年団団長、愛媛県青年団連合会常任理事を務める。当時、全国的に団員が減少傾向であった青年団の入団数が、右肩上がりに増加するという魅力ある青年団活動を展開していた。青年団退任後も少子高齢化が進む地元美川地区で、自治会活動などで積極的に活動している。

◆今回の取り組みの感想

実行委員の中には、知らない方もたくさんいました。それぞれの分野で活躍されている方の意見は新鮮でしたし、人脈が広がりました。

◆今後の展望

皆さんと久万高原町での夢を語るころからでもいいので、地域のためのアクションを少しずつ進めていけたらと思っています。ある時、娘が「猿がお酒を飲んでいるように見える」と言って、石を拾って、絵を描いたことがあります。これが基本的な視点ではないかと思っています。その石を拾う勇気とひらめきがあるか、そして石をどう目的で拾うのか、どの面から見るのか、アイデアをどのように見るのかということが今後も大切だと思います。

◆久万高原町への想い

この静けさがいいというまことにしたいです。何かを無理に変えるのではなく、久万高原町にある静けさ、安らぎ、時間の流れがいいと感じる方に来ていただけたらいいのではないかと思います。人口の減少はとめられません。それを逆手にとつて、一人ひとりを大切にす想いの場にする事で、久万高原町の役割が果たせるのではないかと思います。

分科会報告

コーディネーター：いよココロザシ大学

理事長 泉谷 昇氏

分科会報告：①縁側発見プロジェクト

Group 縁側 部会長 二宮 悟郎氏

②集落の未来を考える！

お宝探し隊 部会長 坂口 大作氏

実行委員会役員：実行委員長 竹森 洋輔氏 / 副実行委員長 高山 泰子氏 / 副実行委員長 大原 貴明氏

第1分科会報告

パネラー全員に共通していたことは、情熱だった。情熱を持って活動していれば、人が集まってくる。会場から意見が出たが横の繋がりも大切にしないといけない。今回、実行委員会で異業種のメンバーが集まったことがそのきっかけになったのではないかな。

第2分科会報告

地元をなんとかかしたいという思いが活動に繋がっていた。地域の宝はアイデア次第で見つけられるものだと思う。その人材を増やしていくことも必要だと感じた。フェスティバルはやって終わりではなく、スタートである。



委員長、副委員長ともに、これからの活動が大切であることを話されました。今回のテーマは、「活動と気づきの広がり」でした。これからは、横の広がりが増えてくることも話されました。参加された方がこの緩やかなネットワークに参加することで、さらに活動は広がっていくのではないかと思います。

コーディネーターの泉谷氏からは、このフェスティバルをすることが目的ではなく、これから活動していくことで、横の繋がりや地域の輝きが生まれてくるのではないかと最後にお話がありました。

今回の取り組みをとおして、久万高原町内で異業種の方たちが繋がるきっかけになりました。これからの久万高原町の取り組みに期待したいと思います。

インタビュー



実行委員長 竹森 洋輔 氏

昭和50年、久万高原町下畑野川に生まれる。長野県農業大学校及び長野県果樹試験場を経て平成8年、家業の観光果樹園『竹森ガーデン』を継ぐ。現在は、久万高原町青年農業者連絡協議会の活動と共に平成21年に異業種連携で設立した『合同会社久万郷』のメンバーとしてさらに活動の幅を広げる。平成25年度から、久万高原町観光協会副会長を務める。

◆今回の取り組みの感想

今回、社会福祉協議会とはじめて連携をしましたが、その取り組みの姿勢に感銘を受けました。実行委員会では、先の見えない課題を考えていったわけですが、これからもこういった場が必要だと思いました。また、「新しい公共」という言葉も、今回初めて知りました。行政に頼るのではなく、民間で地域課題を解決していく必要性を知りました。

◆今後の展望

個人的には、「まちづくり」と「福祉」を結びつけることを探してみたいと思っています。今まで支援される側とされてきた方も地域の担い手となって、一緒に地域を考えていくことができたら、今までとは違ったことができるのではないかと思います。今後、新しい会議体をつくっていくことも、まちづくりの形なのかなと考えています。

◆久万高原町への想い

全国的に見て、10年早いペースで久万高原町の少子高齢化は進んでいます。この現状に立ち向かい、何ができるのかを考えていきたいです。そのためには、どういう取り組みが町を元気にするのか、様々な方の意見を聞く場が必要だと思います。そして、久万高原町がモデルになり、同じ課題を抱えた他市町にモデルプランを示せるようになればと考えています。もちろん、久万高原町内だけでできるとは思っていません。中予、愛媛県、四国で様々な地域での活動の事例があります。そういった地域、そしてその地域の担い手の方たちと、地域連携、人間連携しながら、地域課題の解決に取り組んでいけたらと思います。